

「みんなで進める協働のまちづくり

～地域課題の解決に向けて、協働の観点からまちづくりを見直してみよう～

市民活動団体の課題解決を図るため、協働の基礎に立ち返り、協働のまちづくりとは何か、協働をすすめていくには何が必要かを考えることを目的として、セミナー及びワークショップを開催しました。

日 時：令和元年8月25日（日）10：00～12：30

会 場：江別市民活動センター・あい（B会議室）

講 師：溝渕 清彦氏

（GOOD?WORKSHOP）

内 容：

●セミナー（概要）

「協働」という言葉がありふれてきているが、この言葉は2000年前後から徐々に新聞で多く取り扱われ、「市民参加」の言葉に置き換われて使われるようになってきた。協働という言葉は、行政側の財政改革の流れの中で世の中にあふれるようになってきた。

江別市では平成18年度に協働のまちづくり活動支援事業が始まり、早い時期から市民の方々から提案をもらい、まちづくり活動を支援する事業が開始された。そして、江別市自治基本条例が平成21年7月に施行され、その中の協働の定義には、市民及び市が、それぞれの役割及び責任を理解し、互いに尊重しながら協力して取り組むことを指している。その後、江別市市民参加条例が平成27年10月に施行されている。

「協働」という言葉が生み出された背景には、元々は「Coproduction」という、海外の研究者の方々によって作られた造語に、日本の研究者が「協働」という言葉を当てたと言われている。この単語の通り、単に一緒に働くだけではなく、何かを生み出していくこととして元々の協働という言葉の意味に含まれている。協働を具体的に進めるには、対等な関係で共通の目的に向かって一緒に活動していくことが必要である。協力を呼び掛けるだけになると、そこには目的の共有が行われず、一時の関係のみになってしまう。双方の団体の主体に共通のゴールや一つの目的を設定できたときに協働を進められる。そのため、共通の目的をどこに見出せるかが協働のポイントになる。共通のビジョンに基づいてお互いに役割分担をして、連携や協働ができるので、相手の団体のことについて



て分からなければならない。相手の大学や企業、団体がどのようなミッションを持っていて、それが私たちの持っているミッションと合うかどうか話を聞き、そしてこちらからも発信していかないと一緒にできるかどうか分からない。双方向の想いにするためには、相手の考えていることや相手の本当にやりたいことは何かというのを聞くことである。つまり、協働を実践するときには相手が何をしたいのかを知ること、自分たちが何をしたいのかを明確に伝えることである。それができれば一緒に何かを生み出すきっかけがつけられる。

団体にはそれぞれの強みと弱みがある。団体によってそれぞれの強みをしっかりと重ね合わせて、よりよい事業、効果を出していくことが重要である。自分のテーマやビジョン、ミッション、将来像を明確にし、それが誰と共有できるのかを調べて、アプローチをして、トライアンドエラーをしていく。協働を進めていくところが重要な部分ではあるが、その時の相手がNPOや行政機関、住民相談会、企業、学生など、それぞれで特性が違うので、誰にアプローチすると上手く進められるのか。それぞれのパートナーの特性を考えながら作戦を立てていくことが、協働を構築するための作戦の部分になる。協働とまちづくりはほぼ同じ意味で使われているような印象だが、これらを住民が全てやるというわけではない。それぞれの強みや弱みがあるので、行政や中間支援団体も活用してお金の出処など、戦略的に考えてやっていくと良い。

●ワークショップ

アイスブレイクとして、それぞれA4の白紙に、名前や所属（市民活動団体等）、取り組んでいる地域課題、協働に関連して困っていること（または疑問）を記載し、自己紹介をする。その後、「自分の団体の取り組みを具体的にどのようにしていくと協働が進むのか」をテーマに、自己紹介の用紙を参考にグループをつくり、それぞれの団体が現在抱えている課題と、解決策として自分の団体でできること、中間支援や行政ができることについて話し合いをする。最後にそれぞれのグループで出した内容を発表してもらう。



参加者からは、「今日が出会いの場になり、最初の一步になったように思った」、「まちづくりをいろいろな方向から考えている方たちがたくさんいることが知れて良かった」などの感想が寄せられました。